【別冊第3号】 2015.2.28発行

DRAMAかながわ 別冊4号

ＤＲＡＭＡかながわに“僕らの演劇”という劇評を載せるページがあります。神奈川県演劇連盟加盟劇団をお互いに鑑賞し親睦を深めるとともに、より良い芝居創りに活かす目的で評価しています。今回、ＤＲＡＭＡかながわ別冊として多くの劇評を一冊にまとめることにしました。秋から冬にかけて各劇団は一年の集大成として数多くの作品を舞台で行っています。連盟加盟劇団の舞台をＤＲＡＭＡかながわで振り返っていただきたいと思います。

神奈川県演劇連盟合同公演

文：劇団河童座　横田和弘

「EMクラブ」　劇団河童座　作・演出：横田和弘

2015年2月28、3月1日　神奈川県立青少年センター　ホール

ＥＭクラブをご存知でしょうか。「ＥＮＬＩＳＴＥＤ ＭＥＮＳ ＣＬＵＢ」の略がＥＭクラブなのです。

「ＥＭクラブ」とは「戦前は旧日本海軍の下士官集会所で、米軍による接収後に　ＥＭクラブと呼ばれた。飲食店やダンスホールなどを持ち　渡辺貞夫などジャズミュージシャンも巣立ったことでも知られる。敷地は１９８３年に日本に返還され、解体。９４年に現在の横須賀芸術劇場が入る２１階建てのビルが完成した」（朝日新聞記事より）

ご存じある方は少なくなってしまったかもしれない。横須賀ですらＥＭクラブのことを知らない若者たちの方が多い。

横須賀市のホームページを紐解くと。明治３５年に横須賀海軍下士官集会所として設立され　戦後は駐留軍のＥＭクラブとして…。（要約）としてあまり多くを語られていない。写真数枚と簡単な歴史を書かれているに過ぎない。

当時としては　東洋一の劇場設備を誇り、ルイ・アームストロングやらベニー・グッドマンなど本場のジャズマンから雪村いずみ・江利チエミ・渡辺貞夫・クレージーキャッツなど日本の名だたるジャズマンが集結し、本物のジャズが聴かれるなど話題も豊富。日本一を語ることのできる、魅力的なホールであったのに…多くを語られていないのだ。

日本のジャズの　発祥の地の一つとして　誇ってもいいはずの「ＥＭクラブ」なのに…。日本初ではないけれども

そのクオリティーの高さとか、本場のジャズと言えば、遥かに「ＥＭクラブ」の方が　格が上だったと聞く。それなのに…

それは　単に劇場としてではなく　ＥＭクラブには　色んな要素が含まれていて、要するに　米軍兵士の娯楽施設としての趣が強く、薄暗い門の中は　つまりは日本ではないに等しい施設であったせいかもしれない。

つまり語れない多くの姿を持っていたからに違いない…。日本としても、アメリカ・横須賀…どの立場にとっても、語れない何かが存在していたからに違いない。

基地の街・横須賀。ジャズの街・横須賀。米兵の闊歩する街・横須賀。ドル紙幣の舞うドブ板通り・娼婦の街・横須賀。敗戦の傷跡を背負った人たちの街・横須賀。横須賀は華やかな街だったのか…怖い街だったのか…。

そんな　闇と光の間を生き抜いた　たくましい人々の話が「ＥＭクラブ」です。

地元の　郷土史家　山本詔一氏からの取材で集めた事実に、フィクションを交えた、戦後２６年ごろの話です。

ベース（米海軍基地）前のドブ板界隈は「怖い街」子供が近付いてはいけない場所と教えられてきた時代の話です。

今時代は変わって、跡地には芸術劇場があり　ドブ板も観光スポットとして人気を集め、綺麗にもなったし、おおきく変貌しています。

でも、忘れてはいけないこと、蓋をしてはいけないことが　たくさんあるはず…の想いで創るのが「ＥＭクラブ」なのです。

ただ暗い話ではなく　懐かしのジャズあり　踊りあり　笑いあり　悩みあり　見どころたっぷりの舞台となるはずです。

いよいよ　来年２月２８日、３月１日の公演を目指してスタートをしました。

出演者の中には、ＥＭクラブを知らない世代が　多くいます。そんな仲間たちと、色々なことを、考えながら、芝居創りは進んでいます。

今回の合同公演は、劇団河童座を中心に、ベアフットシアター・劇団Ｐｇ・スカミュー・一般公募の参加者で　横須賀のメンバーが　ほとんどです。

不安があります。チラシにも、この紹介分にも　とにかく横須賀の文字がたくさん踊っています。出演者も横須賀の人間がほとんどです。

しかし、公演場所は　横浜。神奈川県立青少年センターなのです。もし、横須賀からの民族移動なら意味がありません。

今でも　横須賀と言えば、米軍基地の街・自衛隊の街との印象が強いのは事実です。確かに　昔から横須賀は軍港の街として栄えて？きました。米軍基地と共存してきたのも事実です。

沖縄は今でも、政治的問題として、日本の問題として騒がれるのですが、横須賀は何故か　騒ぎになりません。おかしな話です。

そんな　横須賀を知ってほしいのです。横須賀が抱えた問題は　日本の問題でもあったのですから…。決して　横須賀ローカルな話ではないのです。これが作品の想いです。

あまり　暗くならずに　でもしっかりとテーマを押さえながら　良い舞台にと　船出を始めました。でも、正直アウェイ感もあり、集客が不安です。

さらに不安なのは、本番当日に　ＫＡＡＴ（神奈川芸術劇場）では、劇王全国大会が開かれています。神奈川県演劇連盟も関係している行事です。

２月２８日、３月１日は　青少年センターとＫＡＡＴの梯子も…あるいは連日の観劇もいいものかもしれません。

是非、是非、沢山の方々に　観に来ていただきたい作品です。

よろしく　お願いいたします！

まりこ☆みゅーじあむ

「おはなしころころ」

原作：きむらゆういち　構成・脚色・演出：川井 眞理子

８月３０日　於：相鉄本多劇場

開演から５分ほど遅れてしまい、入ってみると、出演者と子どもたちが一緒に歌を歌っているところでした。子どもたちは舞台の上にもいました。

桟敷部分には、大きな布団のようなものが敷いてあり、何組かの子どもたちとおかあさんが、くつろいだ感じで座っていました。キーボードと、スティールパンなどの打楽器の生演奏もしています。

歌は、「そうだ村の村長さん」。懐かしい！私も子どもの頃、母と歌っていました。でも、こんなに長い歌詞があるとは知りませんでした。

それから、「創ってみよう」という事で、舞台装置や小道具を、客席の子どもたち、大人たちを巻き込んで、一緒に

創り始めます。舞台の上にある二つのオブジェは、一つには綿の塊をペタペタ付けてヤギ（羊？）に変身、もう一つには黒っぽい皮の切れ端のようなものを貼り付けてオオカミに変身しました。雨のシーンで皆が鳴らす「でんでん太鼓」を作ったり、石として投げる新聞紙を丸めたりもします。子どもも大人も、笑顔で創っていました。

ひととおりの製作が終わると、朗読劇「あらしのよるに」が始まりました。この作品はあちこちで、アニメや朗読や芝居になっているので、ご存知の方も多いかもしれませんが、あらしの夜に出会って、弱肉強食の関係を乗り越えて友情を育むヤギとオオカミのお話です（大雑把すぎますね）。

朗読劇ではありますが、出演者が皆、生き生きと演じられていて、生演奏の音楽（スティールパンの音はステキ！）や効果音とも相まって、ヤギやオオカミたちの住む山や川や谷が、雨や雷や風や陽の光が、見えてくるようでした。

ラストシーンの、大きな満月を背にしたヤギとオオカミのシルエットには、じーんとしました。

子ども向けのお芝居などで、いわゆる客いじりをしても子どもが乗らない、というケースもありますが、まりこ☆みゅーじあむさんは、普段からお話し会などもされている大ベテランなので、さすがにお上手です。会場が一体となった暖かい雰囲気でした。この日は作者のきむらゆういちさんもいらしていました。

創立10周年おめでとうございます。「おはなしころころ」は相鉄本多劇場では最後でしたが、まりこさんはきっとどこでも、この雰囲気が作れると思います。でも私は、この日舞台に上がった子どもの中に、何年か後に「昔ここに劇

場があって、舞台に乗ったことがある」なんて思い出す子がいないかしら、とちょっと感傷に浸ったのでした。

岡本みゆき

風雲かぼちゃの馬車

「一遍」

脚本：重信臣聡　演出：土井宏晃

１０月９日～14日　於：相鉄本多劇場

どのような「一遍」を見せてくれるのか私には期待が大きかった。

ニューヨークで好評を博した舞台はどのようなものなのか。風雲かぼちゃの馬車が「一遍」の波乱の生涯を題材にしたことは、優れた選択だと思った。ダイナミックな集団演技を得意とするこの劇団にとって、一遍が彼の教えに従う民衆（時衆と呼ばれた）を率いて日本中を遊行したエネルギーをどのように表現するのか、また私は「一遍」がすべてを捨て生涯を捨聖（すてひじり）として信徒（時衆と呼んだ）について興味があり期待して劇場に向かった。

「一遍」の舞台は期待に違わずにすばらしかった。一遍の生涯を９０分にまとめるのは、たいへんだと思うが土井＋重信コンビの舞台は簡潔に快適なテンポで展開した。エネルギーが余って相鉄本多劇場のステージでは手狭な印象を持った。

ＮＹタイムスほかの現地メデイアの好評も判る気がした。風雲かぼちゃの馬車にとってステップ･アップの機会となることを祈りたい。「歌って踊って人を斬る、」 心をゆさぶるエンターテイメント集団をめざすかぼちゃは一定の目的を果たしつつあると感じている。

しかし、それだけでこの集団の進化があるのかという疑問がある。いくつかの「かぼちゃ」の舞台を観ていて、かすかな不満があるとするならば、「かたち」の演技を乗り越えて内実を深化する作業が求められていると思う。

「一遍」で言えば全国各地を遊行するなかで六字名号「南無阿弥陀仏」を絶対として、民衆（当時、人間とは考えられなかった下人、非人をふくむ）に賦算（お札くばり）踊り念仏で極楽浄土へ導いた一遍の宗教者としての苦悩が台本に書き込まれていれば、よりスケールの大きな作品になったのでははいか。

風雲かぼちゃの馬車のこれからの活躍が期待される。

横浜小劇場　荒井賢一

studio salt

「柚木朋子の結婚」

作･演出：椎名泉水　１０月１１日～１９日、１１月１日～１６日

於：鎌倉/古民家スタジオ･イシワタリ

臆面なくいうと椎名さんのファンである。語弊があるので正確にいうと椎名泉水作品のファンである。その椎名さんが座付きの作家で演出を担う「劇団Studio Salt」が県演連に加盟した。とても嬉しい。

さて、そのStudio Saltによる２年半ぶりの新作は、鎌倉にある古民家スタジオ・イシワタリで上演された『柚木朋子の結婚』。ファンとしてはまさに「心待ちにした」新作である。かつてこの劇団が精力的に展開してきたのは、「ギャラリーシリーズ」という“劇場ではない空間”での公演であり、ブランクをはさんだ本公演もその系譜に連なる。

『柚木朋子の結婚』の物語はとある古い家の一室で展開する。軽度の認知症を発症している老母と同居する未婚の長女朋子。その朋子が突然結婚すると言い出す。相手は近所の作業所で働いている知的障害のある男。突然の話に、それを知った弟や妹は驚いて実家を訪ねる。なぜ知的障害者と結婚しなければならないのか。それは障害者への同情（憐れみ）なのではないのか。朋子の結婚をめぐって、兄弟姉妹のそれぞれの思いが露呈してくる…。古民家の風情と作品世界がリンクし、観客はまるで本物の「柚木家」を覗き見しているような感覚に陥る。

浅生礼司（麻生０児改メ）、東享司、山ノ井史、鷲尾良太郎らメンバーの、抑制されたナチュラルな演技が椎名作品を根底からささえているのは言うまでもなく、勝碕若子（よこはま壱座）、松岡洋子（燐光群）、萩原美智子（東京タンバリン）といった実力ある客演陣が、揺るぎないリアリティをもたらしていた。

本作に限らず椎名作品は、現実と虚構があやういバランスで調和しているのが特徴である。と同時に、何気ない会話や状況の中に、鋭利な刃物のような毒々しい本音が見え隠れし、見終わった後にいささか居心地の悪い「ひっかかり」が残るのも特徴である。

しかしながら今回は、観劇後の印象が今までとは少し異なる。後味が柔らかく温かいのである。知的障害者との結婚が愛なのか同情なのかという、日常生活の中では

意識することがない（目を背けている）命題を突きつけられながら、観劇後の心の中には、おかしなことに「祝福」のような思いしか残らない。

２年半のブランクの間に何があったのか。椎名さんがプログラムに書かれていた言葉から、安易な類推をすることは避けたい。きっとこれは新しい椎名ワールドの開演ベルなのだ。次回作が今から楽しみである。　　井上 学

劇団こゆるぎ座

『相州小田原宿「筋違橋心中」』　１０月２５日、２６日

作：後藤翔如　演出：楠田正宏　於：小田原市民会館大ホール

劇団こゆるぎ座、秋の定期公演『相州小田原宿「筋違橋心中(すじかいばししんじゅう)」』を観劇しました。相変わらず早い時間から入場のために列をなし、市民会館を埋め尽くすお客様。

タイトル通り小田原を舞台にしたお話。筋違橋とは国道１号線の箱根口交差点から箱根に向かう東海道筋の両側が筋違橋町らしい。この作品は長年にわたり座付き作家でいらした後藤翔如氏が３０年ほど前に小説志向から戯曲創作へと転換した第１作目の再演なのだとか。

江戸時代の小田原城下町を舞台に居酒屋と指物師の工場が交互に転換、最終場に出てくる街道筋の三幕八場で構成されていました。幕が上がると相変わらずの上出来の舞台、細かな小道具にまでこだわった居酒屋から始まる。家具職人の巳の吉とその妻おりつが些細な事で離ればなれだった二人が、人情味ある居酒屋の夫婦やお節介な飯盛り女のおかげで再会する。再会は果たすものの…というお話。物語の最後は雪が舞い散る筋違橋の街道で心中という切ない幕切れ。

台詞のあちらこちらに小田原でなじみの地名等が出てきて昔ながらの小田原を感じることが出来ました。ベテランの役者さんが活躍する中で飯盛女(おもん)役の女優さんが二人を取り持つために奮闘する良い味を出していました。

しかし、全体的に見ると、ところどころ台詞に行き詰まったり間なのか思い出しているのかわからないシーンがありました。今年は少し多かった気がします。役者が台詞を止めるとシーンが止まってしまい、ふと現実に戻されてしまいます。それだけが少し残念でした。

２０１５年度は７０周年を迎えるこゆるぎ座さんですが、若い役者さんも良い味を出しながらこれからも毎年一回の定期公演を継続して行かれるのでしょう。

演劇プロデュース『螺旋階段』　田代真佐美

ヨコスカ・ベアフットシアター

「スーパーパントマイムシアター」

構成・演出・振付：江ノ上陽一　１１月７日～９日

於：神奈川県立青少年センター多目的プラザ

「パントマイム」私はこれを路上でのパフォーマンスや、テレビでしか見たことがない。そこに実際に「ない」ものを「ある」ように魅せるパフォーマンス。それがパントマイムだと思っていた。しかしこの舞台を見て、それは非常に視野の狭い考え方であり、パントマイムは単なるパフォーマンスではなく、それはエンターテイメントに出来るものだと気付かされた。

オープニング・エンディングを含む１１のプログラムの中には、老若男女が楽しめる全てがあった。オープニングは、ほぼ全てのメンバーで繰り広げられるダンス。それはもちろん「パントマイム」の要素がしっかりと組み込まれており、またクラシカルなものから現代の要素まで含まれた圧倒的な迫力のある踊りだった。

そして男性のみが出演するプログラムでは、男性の肉体をしっかりと見せるトランクを使ったマイムとマジック。またそのコメディカルな動きは、まるで昔見た「トムとジェリー」のアニメを見てるかのようだ。対して女性のみのプログラムは、女性のしなやかさを生かした神秘的な表現に目を奪われる。さらに芝居仕立てのマイムも２本。演者はほぼセリフを使用せず、マイムとノンバーバルコミュニケーションで話が進んでいく。言葉がなくとも芝居が進行していくのを観るのは、圧巻としか言えない。

さらにショートコメディや観客を巻き込んだクイズ問題など、笑いと観客への心遣いも忘れないエンターテイメントの重要な要素もしっかりと含まれていた。ラストは朗読劇とマイムのコラボレーション。宮沢賢治の不可思議な世界をマイムで表現するのは、観たあとだから言えることなのだが、もはや当然のことのように感じさせた。そしても

ちろんパントマイムの本質を忘れない、レガソッタという男性の一人マイム。彼一人の動きで拍手が巻き起こる。それはマイムが上手なだけではなく、その心までも伝わってくる様が美しかったからだと思う。

パントマイムは「ない」ものを「ある」ように魅せる。しかしそれはモノだけでなく、言葉までも、まるで話しているかのように観客に伝え、心を動かすものなのだということに気付かされた、素晴らしいエンターテイメントだった。ただ見るときに一つだけ注意していただきたいのは、大きな音が苦手な方は最初だけ気をつけた方がいいということだ（笑）　　風雲かぼちゃの馬車　南雲秋助

劇団蒼い群

「月夜の道化師」

作:渡辺えり子　演出:福本幸男　１１月８日、９日

於：横須賀市立青少年会館

認知症、戦争、震災。一つ一つが大きな大きなテーマではありますが、それを身近な日常に落としこんであることでまるで自分の家族の出来事のように感じられるそんな作品でした。

日常の風景を描く前半。各々の悩みを抱えて花田家に集まっている登場人物たち。認知症の春さん。兄への申し訳なさと春さんに対する献身的な想いの中に自分をなくしてしまう青児。自殺未遂を繰り返してしまう青児の元教え子。年下の上司のもとで営業の仕事に馴染めず会社を休んで草野球に励む息子。亭主関白に悩む息子嫁。両親に相談なしに入籍を決めてしまった孫娘。それぞれの問題は決して軽くない悩みばかりですが、軽快な日常会話のやり取りの中にあると不思議ととても身近なものとして心に響いてきました。観客層は幅広く様々でしたが、観る側がなにかしら身近に存在する問題・悩みを登場人物の誰かしらに投影し「似ている」と共感できる作りになっているのが面白かったです。

認知症の発症を「あっちの世界」。症状が治まっている間を「こっちの世界に帰ってきている」と表現していたのも印象的でした。認知症の家族と暮らす中での複雑な心境を表すぴったりの表現だと感じました。そしてそんな花田家の中に何よりも大きな影を落としているのが戦争中のできごとでした。

戦後６９年、特に戦後生まれの年代にとってはともすれば戦争は遠い昔の出来事のように思ってしまう事があります。しかし、実際にその戦争の時代を生きた方々にとってはその戦争を経た今がまさに「日常」なのだと思い知らされました。何年経っても、この「平和な時代」と呼ばれる今になってもその戦争が残した傷は深く、癒されることはありません。「頭の良い学者さん」たちが決断した戦争は一生癒えない傷を残し、家族を引き裂いていきます。

最後の満開の桜の装置のもとでの場面は春さんの切ない歌声と相まって見終わった後の余韻となり心に残るシーンとなっていました。　　劇団やぶさか　飯塚春香

劇団よこはま壱座

「蠅取り紙 ― 山田家の5人兄妹 ―」

作: 飯島 早苗・鈴木 裕美　演出: 濱田 重行

11月14～16日　於：神奈川県立青少年センター　多目的プラザ

十一月十四日の昼の回に、よこはま壱座「蠅取り紙」を観て来ました。

さすがに老舗劇団だけあって、チケット購入から、ホールへの案内まで隙が無い。これ大事ですよね、観劇の前段階。ホールに入ると、これまたさすがイトウ舞台工房による古い民家のセット。リアルでありながら、舞台美術を堪能出来る見事さ。茶箪笥の中、壁に飾られた表彰状、庭の植木等々、そこでもう楽しくなってくる。

今回はキャストが七名、少し失望。大好きな河住さんはじめ、壱座の座員が受付周りに居たので覚悟はしていたが…。何となく暮れの壱座は、座員総動員顔見世芝居みたいな固定概念があったので。老舗の芝居は、芝居自体はもちろんだが、役者見るのも楽しみだものね。

さて開演。二男三女と母、そして婿さんの七名が、テンポ良く笑わせてくれる。息の合ったテンポ、間は劇団ならではと思わせる。

話は、母親が父親とハワイ旅行に出かけるところから始まる。留守の実家に集まった五人の兄弟。それぞれの人生に大小の問題を抱え、ぶつかったり、慰め合ったり。よくある物語と思わせて、いきなりハワイに居るはずの母が居るではないか。母の魂だけが、帰ってきてしまうという予想外の展開。開幕からハイテンションだったのに、さらにギアを上げた超ハイテンションの芝居に、大笑いして、シンミリして。本当の家族のドタバタを垣間見るような楽しい芝居でした。個人的には、場転換の生演奏の歌は、せっかく盛り上がった気持ちが冷めるようで、いただけなかった。でも、それも演出の試み、心意気なんだろうな。何事も。新規開拓は必要だものね。

僕個人は最近、プロジェクト公演の限界を感じていて、来年あたりから劇団をキチンと確立しようかななどと思っ

たりする訳です。壱座や他の劇団の芝居見ているとまぶしかったりして。

また、壱座のオールスターキャストの髷物がみたいなああと思いつつ、逗子に観劇の為急いだのでありました。芝居って、面白いなあ。　　H&Bシアター　別府寛隆

劇団かに座

「切り子たちの秋」

作：ふたくちつよし　演出：田辺晴通

１１月１４日～１６日　於：関内ホール・小ホール

神奈川県演劇連盟のメンバーは２０代～７０代である。デジタル世代とアナログ世代が混在している。理事会では連盟のTwitter等の開設で会議が紛糾する……苦笑

僕は世代的にはアナログであるが、PC、スマホがないと生きていけない。所謂、デジタルオヤジである。

劇団かに座公演「切り子たちの秋」公演を観劇させて頂いた。舞台の時代背景は昭和３０年代～４０年代の大田区辺りの町工場と推測した。キーワードは黒電話、バヤリースオレンジ、土手の散歩であるが、そんなことはどうでもいい。久しぶりに演劇的なアナログの芝居を観た…．スタニスラフスキー・システムが頭を過る…。その“メソッド演技”の特徴としては、配役された役柄や劇中での状況をその感情に順応して、より自然な所作で演技を行う点である。そのメソッドでは、形式的で表現主義的な古典的な演劇手法とは距離を置き、より現実と近い、自然な演技を追求している。そのため、演技をする過程においては、配役された役柄について徹底的なリサーチを行い、劇中で役柄に生じる感情や状況については、自身の経験や役柄がおかれた状況を擬似的に追体験する事によって、演技プランを

練っていく。派手な演劇的手法は使わずに、リアルな舞台セット、地あかり、暗転を使わずに緞帳の上げ下げで幕間にアクセントをつける。懐かしい演出である。緞帳のタイミングも良く、とても効果的で時空的であった。それが舞台にリズムをつけている。まったく邪魔にならない。緞帳が下りた時もシーリングライトで舞台が途切れない効果で良かった。

この時代にアナログ的な演出がいかに必要かと実感させられた。欲を言えば、下町の秋の設定であれば、事務所の入口の外を照明で朝、昼、夕方等の時間経過と、ラジオや街頭効果音等を使えば、もっとリアリズム演劇が鮮明になるのではないだろうか……。

この国に生まれて良かったと思う作品である。最後に送別会の司会を担当した従業員役が緊張して事務所に入り、司会をする演技は渥美清さんを思い出させた。

ヨコスカ・ベアフットシアター　三浦正行

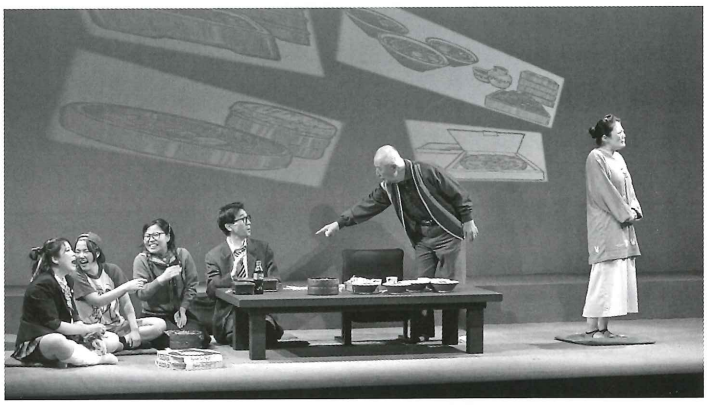
劇団河童座

「わしゃ喰っちょらん」

作・演出：横田和弘

１１月１４日～１６日　於：相鉄本多劇場

63年という歴史を持ち、公演数は２００回を優に超える老舗演劇集団「劇団河童座」だけあって役者一人一人が安定した芝居を魅せてくれた。



今回の「わしゃ　喰っちょらん」はアルツハイマー型認知症を患った家族の苦悩と葛藤という、暗くなりがちなテーマを明るく強く逞しく描いたという作品。

元々、社会福祉財団からの依頼でイベントの催しとして作劇されたものだという、それも２１年も前に！これは脱帽である。当時はまだ認知症は「ボケ」「痴呆症」と社会的に理解も浅く、患者を抱えた家族はひた隠しにすることも多く、まして介護制度も確立していない時代にこれだけの芝居を見ることが出来た皆さんは心強かっただろう。

しかし私は作劇の経緯を知らずに観劇してしまった為に、些かの勿体無さを感じていた。とても解りやすい芝居なのだけれど「まるで認知症のシンポジウム等の講演の一環で上演されるような説明臭さが芝居の流れを冷ましているようだ」と。

全てはパンフレットに書かれた芝居の経緯を読んでいればこの違和感はなかったのだと猛反省だ。故に説明を読む前に観劇した者の感想だということを言い訳しておこう。私の母も認知症だったので葛藤の日々がフラッシュバックして少しばかり欲がでた。「親が自分のことを真っ先に忘れてしまった」今回は父親が息子を忘れたのだが、苦笑いで流せるのだろうか？私は何よりも言葉にならないほどのショックだったけど…男女の差なのだろうか？大好きな祖父が変わっていく姿を素直に受け入れ認知症の症状に付き合っていける模範的な子どもたち。ギリギリの精神状態まで介護に疲れていく嫁の姿にホームドクターが「これからもっと大変になるんです！頑張って！」と言われたら…当時の私なら号泣ものだ「これ以上どう頑張れというのだ」と。とは言え、実は認知症だということを察知していたおじいちゃんがドクターに託した手紙が披露され介護への覚悟ができ、愛情あふれる日常が確立されるというドラマティックなラストシーンでは自分も素直に胸が熱くなった。

それだけに、場面の展開や家族の紹介などをト書きのように説明せずに、嫁以外の苦悩や、時に揺らぐ絆も少しばかり加えて、介護の選択等の「リアル」が盛り込まれた「現代版」を観てみたい。これはあくまでもいい芝居だけに湧き上がる個人的な「欲」である。これからも認知症患者を持つ、持つかも知れない方の為に大切に上演を重ねて欲しい（拍手）

劇団こゆるぎ座　保乃しん

演劇プロデュース『螺旋階段』

「その向こうへ」

作・演出：GREEN

１１月１５日・１６日　於:小田原市生涯学習センターけやき

11月１６日の公演を観劇させて頂きました。村人達の考え方がどのように変化したのか、それをある事件を通じてあきらかにしていったお芝居であろう思います。しかしながら以下①から③の点で欠けたものがあると思われました。結果として④のような感想を持ちました。でも舞台の枠を飛び越えるようなエネルギーには感心しました。

①事の発端は何なのか？平和に対する渇望や希求、村への期待の具体性が欠けている。

②村人の誰が誰たちが何の為に何をしようとしたのか？強烈な欲求にもとづく行動への移行がみつからない。

③結果としてどうなったのか？強烈でドラマチックな印象や、又は大きな犠牲をとおしても受け取るものがあったのか？

④稚拙な社会が安易で重大な結果を受け取らざるを得ない、それでいても力なく挫折を繰り返す人々を温かく見守っているそういった良さは感じた。

でも、本当は演出も作者もそうじゃなくて、もっと攻撃的で、ポジティブに作品を作ってきたのだと思う、それが音楽や動きに現れている。しかし伝わってこないのは村の平

和な社会の描きかた方が寓話的だったからだと思う。テーマ（平和とそれを望む社会のあり方とすればの話だが）が重く苦しいわりにはつらく救われないお芝居でした。

劇団蒼い群　村田次郎

京浜協同劇団

「親の顔が見たい」

作：畑澤聖悟　演出：内田勉

11月21日～23日、28日～30日、12月5～7日　於：スペース京浜

「私は子どもを信じていますから」その言葉を聞いた時、ゾッとした。「信じる」という一見すると美しい言葉は、ここまで狂気を孕むものなのか。

舞台は私立の名門高校。そこでいじめが原因と思われる少女の自殺が起こった。しかし、この舞台にはいじめっ子もいじめられて自殺した少女も出てこない。登場するのはいじめっ子達の保護者である。放課後の学校に呼び集められる保護者達。そこで自殺した少女の遺書に自分の子供の名前が記されていることを知る。焦った親達は遺書を焼き、いじめそのものがなかったことにしようと企てる。しかし、第２、第３の遺書が発見されていき、次第に事実が明らかになっていく。この作品は現代の家族のあり方にスポットを当てている。劇中には様々な事情を抱えている家族が登場するが、それらに共通することがある。「自分の家族のことを知らない」ということだ。子供の学校での様子、家での生活、身につけるアクセサリー、―― 何も分かっていない。それなのにいじめはなかったと言い張る。

自分の中にもモヤモヤした思いが溜まっていくのが分かった。しかし、これは現代の真実を写しているのではないだろうか。よく「他人に関心のない時代」と言われるが、「家族」でさえ、他人になってしまう時代に変わろうとしているのではないだろうか。その上、関心のないことをバレないように「信じる」という自分勝手な言葉を使う。腹が立って仕様がなかった。しかし、そうまで思わせる力がこの作品にはある。特に比較的若い世代の人達に見てもらいたいと思った。現代で問題視されているものが何か、なぜ問題視されるのか、是非この作品を観て考えてほしい。きっと自分の中に何かが残るはずだ。

今回はとても多くのものを学び、勉強させて頂きました。次回の公演も楽しみにしております。

よこはま壱座　三橋巧

劇団「横綱チュチュ」

「きんぎょの羽衣」

作：菱倉あゆみ　演出：団のぼる

１１月２２、２３日　於：磯子区民文化センター杉田劇場

幕が上がった直後、現れた抽象セットの中で自由に動き回る子供達。その生き生きとした様子で如何に演出家が自由且つ綺麗に物語を紡ごうとしているのかが伝わってくる。

舞台となるのは、過疎化、少子高齢化、財政難といった問題を抱えているとある地方の町、タマミ市。そこにある小さな工場を立て直す為にとある一家族が戻ってきたことから物語は始まる。話は子供達の持つ好奇心や友情といった子供独特の輝きと、大人達の、年齢に関係なく一つのことに打ち込んだ時のひたむきさ、そこから見える輝き、という２本を見せていく。タマミ市では様々な問題の打開策として「ふるさと活性化アイデアコンテスト」が催されることとなっていた。そのコンテストに参加する為のアイデアとして出たのがタマミ市のかつての名物であった金魚の養殖をネタとした「ご当地アイドル」だ。そして少子高齢化の問題を抱えたこの町では主婦達（中には孫もいる位の主婦も…）がそのアイドル候補として自ら活動することを決意する。しかし主婦達にプロの意識は当然無く、家庭の事情や私情を優先することでチームの輪が次第に乱れていく。しかし問題は徐々に治まり、ラストのコンテストではこれまでに練習してきた歌とダンスを披露する。

作中とても好感が持てたのはその主婦達を様々な年代の（とはいえ、全体的に年齢層高めだが）女優達が自由闊達に演じていたことだ。所々で挟まれる歌とダンスの素人っぽさが、その土地への愛着と、ある種のリアリティを生みだしていたように感じる。

話の構成は非常にわかりやすく、見ていて安心もするのだが、一度乱れたチームの輪が元に戻っていく部分は若干強引に感じてしまったことが少しばかり残念ではあった。また、子供達の好奇心や友情を少しでも描こうとしていたのであれば、それがもう少し大人達のストーリーと上手にリンクしていければ、大人でも子供でも持つ好奇心、そこに取り組んだ時の輝き、というラストがより腑に落ちたのではないだろうか。

studio salt　山ノ井 史

神奈川県立青少年センター・演劇資料室を御利用下さい

演劇資料室では、外国や日本の戯曲をはじめ演劇雑誌等多くの演劇図書を取り揃えており、戯曲などの無料貸出もしています。
御利用は一回３冊まで２週間借りられます。また神奈川県内のアマチュア劇団の活動記録等もございますので大いに御活用下さい。
演劇資料室で活動して頂くボランティアスタッフを募集しております。（週一回、任意の時間帯に参加いただけます。）

神奈川県立青少年センター２階　演劇資料室　〒220-0044 横浜市西区紅葉ケ丘9-1　☎045-263-4472

神奈川県演劇連盟加盟団体（５０音順）

●H&Bシアター●YAP●演劇プロデュース『螺旋階段』●京浜協同劇団●劇団蒼い群●劇団河童座●劇団かに座
●劇団川崎演劇塾●劇団こゆるぎ座●劇団スタジオソルト●劇団やぶさか●劇団「横綱チュチュ」●劇団よこはま壱座●虹の素
●風雲かぼちゃの馬車●まりこ☆みゅーじあむ●ミュージカルプロジェクト●ヨコスカ・ベアフットシアター●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟ＨＰ：http://kenenren.org/

ＤＲＡＭＡかながわ[別冊４号]　発行日:２０１５年２月２８日　発行:神奈川県演劇連盟
編集:緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）・浅水真子（劇団やぶさか）・海老名信吾（劇団よこはま壱座）・関口素実・山元洋一（外部協力）